

## フランスにおけるピアノ教育への考察

小沢 麻由子

### A study of piano education in France

OZAWA Mayuko

#### Abstract

Nowadays, musicians have been fostered not only in Europe and the U.S but in Asia. Western music education in Japan seems to be at quite high level as an education indigenous to Japan, with a lot of knowledge and experiences having long been introduced from Europe where such music was originated.

Here, I've considered practical piano education today in France interweaving a comparison with that in Japan.

Key Word: music education, piano education, French conservatoires, Japanese colleges of music

#### [要約]

現代は、欧米からもアジアからも音楽家が育つ時代である。日本における西洋音楽教育もその音楽の発祥の地であるヨーロッパから長年の間に多くの知識や経験が持ち込まれ、日本独自の教育として非常に高いレベルにあると思われる。

ここでは、現在のフランスにおけるピアノ教育の実際を私自身の経験と日本のピアノ教育との比較を織り交ぜながら考察した。

キーワード：音楽教育、ピアノ教育、フランスの音楽学校、日本の音楽大学

#### はじめに

フランスと日本のピアノ教育の大きな違いとしてまずあげられるのが、システムの違いである。フランスの音楽学校のほとんどが公立であり、ここで幼いころよりほぼ無料に近いわずかな費用で音楽を学ぶことができる。全国統一のレベル試験が初歩の段階から存在し、大半の学校がそれに参加している。日本では多くの子供が幼いころからピアノを学ぶが、個人の先生、もしくは私立の音楽教室に行く以外方法がなく、国が定める試験というのは存在しない。

## 1. フランスの音楽教育の構造

### 1.1 フランスに存在する公立の音楽学校の種類をあげる。

2007年秋より国公立音楽学校に関する法律が大きく改正され、学校の名称も変更された。日本語で表記する場合は変化がわかりにくいので頭文字をとった通称の変更のみをここに記した。名称の変更は運営母体の変更によるものである。

- 1) 国立高等音楽院 (CNSM 変更なし) パリとリヨンの2校のみ
- 2) 国立地方音楽院 (CNR 変更後CRR) 36校
- 3) 国立音楽学校 (ENM 変更後CRD) 101校
- 4) 公立音楽学校 国家基準同意校 (EMMA 変更後CRC)  
国家基準非同意校 (EMM 変更後EENC)  
両方あわせて701校

これらに加え、私立の音楽学校がある。その数の実情を把握することはできないがそう多くはない。有名校が1~2校パリに存在する。

1) のパリ19区にあるパリ国立高等音楽院はフランス中のみならず、様々な国からの精鋭が集まる、規模、レベル共にトップの学校である。専門教育に特化した教育を伝統とし、優秀な13歳、14歳が入学するのめずらしくない。

2) のCRRは数パーセントの学生をパリとリヨンのCNSMに入学させることを想定した教育をしている。パリ市内にもCRRが1校ある。

1) 4) の順で規模、内容とともに下がる。CRR以下3) 4) の公立音楽院は設立の目的が専門家を養成するための機関ではないが、優秀な教授を頼って日本からの留学生が在籍していることもある。こうした機関は広く門戸が開かれており、多くの子どもたちが学んでいる。こうした公立機関の存在が日本とフランスにおける大きな違いのひとつである。私は4) の公立音楽学校数校でピアノクラスの講師や伴奏員、試験の審査員をつとめたが、学校の雰囲気それぞれ大きく異なり、それぞれの学校の地域社会に存在する人種や階層の特色がそのまま反映されており、これらは日本ではあまり感じることでない興味深いものであった。

1.2 私立の高等音楽院として、レベル、規模ともに際立っているのがEcole Normale de Musique de Paris (エコールノルマル音楽院) である。ピアニスト、アルフレッド・コルトーが理想的な音楽教育の場を求めて1919年に設立し、特にピアノのレベルが高い。年齢制限が全くない特殊なシステムをとっており、入学試験も存在しない。細かくレベルが分かれており、入学の際の演奏でどのレベルに入学するかを判定される。留学生がたいへん多い音楽院である。コルトーの理想とする音楽教育を彼自身から直接受け継いだ教授陣は現在はほとんど

ど亡くなったが、様々な国からの一流の音楽家、CNSMを退職した教授陣が名をつらねている。

## 2. パリ国立高等音楽院・エコールノルマル音楽院・東京芸術大学

ここで、パリ国立高等音楽院、エコールノルマル音楽院、東京芸術大学（以下、東京芸大）の3校をとりあげて比較をしてみる。

2007年の法改正にともない、ここ1、2年の間でのフランスの音楽教育は大きく変化を始めている。フランスにはもともと音楽に特化した大学は存在せず、コンセルヴァトワール（音楽院）で音楽を学ぶ。大学で学ぶことができるのは音楽学である。最近になって、パリとリヨンの国立高等音楽院は学士、修士、博士といった学位を明確に設定した。これは、ヨーロッパ連合（EU）などの拡大にともない、国境がどんどん取り払われつつあるヨーロッパで、他国の大学、ないし大学院に留学したり、留学してくる学生のために資格をわかりやすくそろえる必要があったからのようだ。

日本の音楽大学は卒業するために、音楽のみならず一般教養の単位も必修となっている。実際東京芸大では体育の授業までもが必修であった。一方、伝統的に実技の実力重視であったパリ国立高等音楽院では学士などの学位を明確にしたために取得すべき単位が増えたとはいえ、和声、アナリーゼ、室内楽、初見、音楽史などの音楽科目と語学だけが卒業に必要な単位であり、それでも日本と比べると少ないであろう。エコールノルマル音楽院においては修了に必要な科目はパリ国立高等音楽院とほとんど同じであるが、他大学で取得したそれらの単位が認定されれば、専攻実技のみで修了することもできる。

### 2.1 パリ国立高等音楽院（CNSM）

入学試験の受験資格は3回までであり、ピアノに限っては第1課程（学士）入学時点で22歳未満でなくてはならない。日本からの留学生は日本の大学を卒業した後では受験資格がないことになる。第1課程（学士）を3年、第2課程（修士）を2年で修了する。今回の教育改革にともなって増えた音楽史や芸術史などの教養科目は当面ソルボンヌ大学で受講しなければならない。また、学士号を取得できるということは入学する際に高校卒業資格（バカロレア）が必要となるということであり、これまで特別に才能のある中学生などが入学してきた伝統がなくなるのかといった疑問があるが、まだこの制度が始まろうとしている段階であるため確認がとれていない。

#### 2.1.1

パリ国立高等音楽院、第1課程入学試験の試験曲をここに挙げる。

#### 1次試験

筆記試験：聴音（dictées, reconnaissance de tonalités et cadences）

口頭試験：リズム課題（lecture rythmique）

視唱（lecture chantée）

## 2 次試験

1) 以下の中から任意のフーガ1曲（プレリユードは除く）を選択

- J.S.Bach 平均律（ 巻および 巻）

- Chostakovitch 24のプレリユードとフーガ 作品87

2) Chopinのエチュードより任意の1曲およびChopin以外の任意のエチュード1曲（計2曲）

3) 古典もしくはロマン派の作品より任意の1曲および近代もしくは現代の作品より任意の1曲（計2曲）

2)と3)はそれぞれ当日試験官が1曲を指定する。

## 3 次試験

1) 初見視奏（déchiffrage）

2) 試験日2ヶ月前に発表される課題曲（un programme imposé）

## 2 . 1 . 2

パリ国立高等音楽院、在学中の試験曲をここに挙げる

第1課程1年 1) 任意のエチュード3曲（Chopin 1曲、Liszt 1曲、その他1曲）

2) J.S.Bach平均律より2曲（当日指定の1曲を演奏）

3) 試験日5週間前に発表される課題曲

第1課程2年 1) 古典のソナタより任意の1曲

2) 1940年以降の任意の作品1曲

3) 自由曲1曲

（計40分以内のプログラム）

第1課程3年 45分以内の任意のプログラム（複数の時代様式の作品を選択）

第2課程1年 以下を含む50分以内のリサイタルプログラム

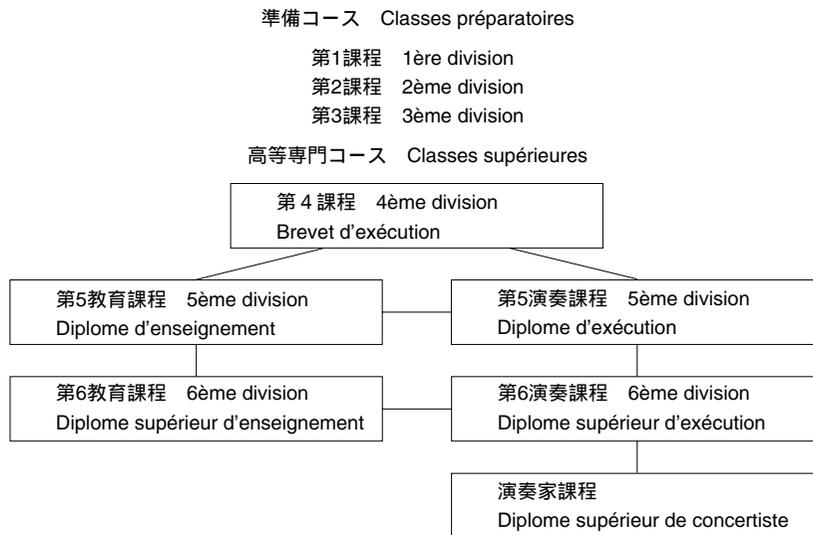
1) 試験日2か月前に発表される課題曲

2) 2つ以上の異なった時代様式の作品を選択

第2課程2年 50分以内の任意のプログラム

## 2.2 エコールノルマル音楽院 (ENMP)

6つの課程に分かれている



高等教育として国から認められているのは の第4課程からで、ピアノの場合日本で音楽大学を卒業した留学生は最低でも第4課程への入学を許可されるようである。入学試験がないかわりに、修了試験に合格するのは非常に厳しいものとなっている。ひとつの課程を修了するのに制限されている年数は の演奏家課程以外にはなく、何回でも受験することができる。 の後、可能な進路は3つのパターンがあり、主に教育者の育成を目的とした へ進級するもの、演奏家になることを目的とした へ進級するもの、その両方を学ぶ

という進級の方法がある。 の第6演奏課程の修了試験は10倍近い倍率の狭き門であり、何年も在籍した後、修了試験の合格を断念する学生も多い。フランスではある一定のレベルに達しているかどうかを判断するものを「エグザマン examen (試験)」と呼び、ある決められた人数の枠に入るレベルが上位の人を選抜するものを「コンクール concours」と呼ぶが、このエコールノルマル音楽院の修了試験は「コンクール」と呼ばれている。 の演奏家課程へ入学を許可されるのはこの第6演奏課程の修了試験を3年以内に審査員満場一致で合格した上位数名および、国際コンクール連盟に加盟している国際コンクールの入賞者のみである。そしてその演奏家課程の修了試験に合格するのは毎年数名であるが、その試験を受験できるのは最大2回までである。もともとはアルフレッド・コルトーがパリ国立高等音楽院の実技に偏った教育に対し、総合的な音楽教育の場を求めて設立した学校であるが、ここ最近、大きな改革を行っている国立高等音楽院に対し、今となってはエコールノルマル音楽院が実技重視のフランスらしい伝統を守り続けているといえるのかもしれない。

## 2. 2. 1

エコールノルマル音楽院、第6演奏課程 (Diplome supérieur d'exécution) の修了試験曲を挙げる。予選とコンクールの間は約1か月である。

### 予選

- 1) 4～6週間前に発表される課題曲
- 2) 各自のコンクールのプログラムから任意の1曲 (大規模なソナタは除く)
- 3) 各自のコンクールのプログラムに含まれる大規模なソナタ  
(当日演奏箇所を審査員が指定)

### コンクール

- 1) 1822年以前の作品
  - 2) 1823～1892年の作品
  - 3) 1893～1960年の作品 (2曲)
  - 4) 1961年以降の作品
- 以上1)～4)計5曲の中に大規模なソナタと技巧的な練習曲を含むこと
- 5) 任意の協奏曲 (全楽章)

コンクールで実際に演奏する時間は最大45分程度であるため、演奏する曲を当日の演奏直前、舞台上で審査員より指示される。協奏曲は全楽章ではないが、必ず演奏する。

## 2. 2. 2

エコールノルマル音楽院、演奏家課程 (Diplome supérieur de concertiste) の修了試験曲を挙げる。

45分の任意のプログラム

## 2. 3 東京芸術大学

2. 3. 1 ここに東京芸術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻の入学試験課題を挙げる。

### 1次試験

- a) J.S.Bach 平均律より任意の1曲
- b) Chopin エチュードより任意の2曲 (当日抽選により1曲を演奏)

### 2次試験

下記a) およびb) より、それぞれ選択

- a) Haydn, Mozart, Beethoven のソナタより任意の1曲 (全楽章)

b) 下記の作曲家群イ) およびロ) からそれぞれ1曲以上を選び組み合わせて15分以上のプログラム

イ) Schubert, Weber, Mendelssohn, Chopin, Schumann, Liszt, Brahms

ロ) Fauré, Debussy, Ravel, Scriabin, Rachmaninoff, Prokofieff, Bartók

以上に加えて聴音、楽典、新曲視唱、リズム課題などの試験がある。また共通一次試験において国語、および英・独・仏より1つの言語を選択しあわせて2科目を受験することが義務付けられ、この結果は実技試験の最終判断に用いられる。

## 2.3.2

ピアノ科学部4年間および修士2年間の試験のレポーターをここに挙げる

1年生 試験なし

2年生後期 20分のプログラムを2つ

3年生前期 30分プログラム

後期 コンチェルトオーディション(任意)

4年生後期 30分プログラム2つ

修士1年 1時間程度のプログラム(研究に関係のある作品)

修士2年 論文および1時間程度のプログラム

学部1年生に試験がないというのが特徴として挙げられるであろう。入学後、試験曲にしばられずに多くの曲を勉強してレポーターを広げることが目的だそうである。3年前期および4年生の試験は奏楽堂での学外公開である。修士号取得に論文を書くのは実技重視のフランスとの大きな違いである。

## 3. 比較による私見

### 3.1 レポーターについて

レポーターの量は東京芸大とパリ国立高等音楽院においては入学試験においては大差がないと思われる。エコールノルマル音楽院は第6演奏課程に限ってみると、1回の試験のレポーターとしてはかなり多いようである。実際、レポーターの多さから、予選を通過したもののコンクールの準備が間に合わない学生が数多くいた。

フランスの特徴として挙げられるのが、試験日数週間前に発表される課題曲であろう。様々な時代の作品が出される。一般的にはすでに勉強したことがある人となない人の不公平をなくすためか、必ず勉強しているような曲は避けられているようだが、時として不公平が生じることもあるであろう。他のレポーターを抱えながら指定された曲を数週間で完成させるという経験は日本の大学ではあまりないのではないかと。こうした課題は子供の試験にもあ

り、幼いころから短期間で曲を完成させることを身につけるようである。

参考までに近年エコールノルマル音楽院にて試験曲として指定されたことのある曲を挙げてみる。

いずれも、与えられた準備期間は5～7週間ほどで暗譜が義務付けられている。

L. Caloianu トッカータ (1998)

F. Schmitt La tragique chevauchée op.70-2 (1922)

Schumann トッカータ

Mendelssohn/Rachmaninoff 真夏の夜の夢より スケルツォ

J. Castérède 4つの練習曲 1番 (1958)

### 3.2 レッスンについて

フランスのエコールノルマル音楽院を例に挙げてみると、毎週のレッスンはいつも何人も  
の学生が聴講していた。すべての教授がそのようなレッスンを行っているわけではないが、  
私の経験はそうであった。自分のレッスン時間より何時間も早く来て、弾き終ってまた何時  
間も聞いて帰る、一日中レッスン室にいることが当たり前であった。実際は聴講に来ている  
のではなく、レッスンの順番待ちであったが、他の学生のレッスンを聞くことは自分が受け  
るのと同じくらい勉強になるものであった。また毎週、人前で演奏する緊張感を体験できる  
場でもある。日本よりも学生同士がお互いの演奏を聴きあう機会が非常に多く、それが切磋  
琢磨することにもつながっているように思う。

内容としては、フランスは感覚的なものを大切にする。作品へのアプローチがまず感覚的  
であり、理論的なものでそれを支えていく。そして、響き、音色から作られる空間への探求  
である。指よりも耳である。耳よりも指になりがちな日本のピアノ教育とは異なるであろう。  
日本にはない、石造りの古い建物や教会などの音響空間の違いも大きく影響していると思う。  
そして生きた音楽に存在する息づかい、フレーズの重要性である。私の師事した故ジェルメ  
ーヌ・ムニエ教授のレッスンでは楽譜に書かれていることをどう読み取るか、ということに  
多くを学んだ。そのために、実際に歌ってみることをよく要求された。読譜というのはとて  
も基礎的なものであると同時に、限りなく奥が深いものである。そして、それを音への表現  
につなげるには具体的に何をしたらよいのか。フレーズを正しく表現するための多くの技術  
を学び、またペダルの使い方でも音楽が大きく変わることを知ることができた。ドビュッシー  
(Claude Debussy, 1862～1918)は大変細かな指示を楽譜に記した。細部にわたる記譜されてい  
ることの読み取り、ペダルによる空間の作り方、フレーズの表現方法、そして描写的な感覚  
はフランスにおける他の様々な国の作曲家の作品への解釈においても少なからずとも影響が  
あるのではないかと。硬質な音を嫌い、柔軟なタッチを持つことの多いフランス人の演奏する  
ベートーヴェンはどこかフランス風であるし、モーツァルトの作品においてフレーズの最後  
を弱くし過ぎると「あなたはいつからフランス人になってしまったの?」とムニエ教授に言わ

れたものである。

おわりに

フランスはつい数年前までラヴェル (Maurice Ravel, 1875 ~ 1937) から直接教えを受けた、というようなピアニストが存在し、私自身その話を直接聞くことができた。フランス音楽が一番充実した時期が時代的に現在に近いからであろう、作品に対する作曲家本人の希望やエピソードといったものが生の情報として入ってきた。フランス人しか教授になることができないパリ国立高等音楽院を中心にその伝統が確実に受け継がれているように思う。そこにはフランス独自の音楽教育が今も色濃く存在している。日本は長年をかけてドイツ、フランスまたはそのほかの国から取り入れた多くの知識、感覚が日本において受け継がれ、すでに独自の歴史がある。もともとは自国の文化ではなかったものをここまで取り入れ、高めてきたのも、日本人の勤勉さと器用さによるものではないだろうか。一方で日本人は受け身の態勢であることが多いように思う。レッスンにおいても自分がこう弾きたい、というよりも、あまり色づけされていないキャンバスにどう色を塗ったらいいのでしょうか、といった具合である。その受け身の態勢は素直さの表れでもあり、それによってより多くのことを吸収でき、色の塗り方によっては素晴らしくなれるのは事実である。西洋の国々が受け継いできた伝統を基礎にした日本独自の音楽教育が今後どのように発展していくのだろうか。現在の日本では演奏の基礎を学ぶ環境は整っている。しかし、そこから先の精神性、人間性を音によって表現していくには音楽教育のみに頼ることはできないであろう。伝統を守りながらも、大きな改革によって新しい風が吹き始めたフランスを今までのように後から追いかける時代ではもうないのかもしれない。今や音楽家は国境を超えて世界を行き来する時代である。日本人だから、フランス人だからといった評価ではなく、国籍に関係なく同じ尺度で評価される。日本も芸術の未来に向かって自ら風を吹かせるべき時代なのではないだろうか。

参考文献

インタビューを中心に多くの資料を参考にしたが、資料はいずれも公刊されたものではないのでここには掲載しなかった。